戦前の京阪神地方における郊外住宅地にみる環境計画の特質

Several Aspects of Environmental Planning for Suburban Housing Development in Keihanshin Area of Japan before World War II

岩井 洋* 宮城俊作**

Hiroshi IWAI Shunsaku MIYAGI

摘要：本研究は、戦前の京阪神地方における住宅博覧会（実物住宅展示会）を開催し、それらを取り込んだ郊外住宅地の開発計画について、その環境計画的な側面を実証的にあきらかにしたものである。計画的な住宅地開発と個々の住宅建築改善のすきまを埋めるべきものとして、敷地計画のありかたを12例の住宅地において具体的に検討した。その結果、敷地の選定段階において、良好な環境条件を前提として開発がなされた初期の事例から、時代を下るにつれて、既存環境ストックとの関係に配慮し、それらを積極的に計画に取り入れるとともに街路や広場、公園などの計画的配置と修景を通じて、ランドスケープ・デザイン的な操作による新しい景観の創出が試みられたことを指摘した。

はじめに

明治末期にはじまるわが国の郊外住宅地開発は、当時の都市環境の悪化に起因する衛生問題や生活様式の近代化がもたらした住宅建築の改善に端を発し、都市インフラの整備といった計画的な住宅地開発の側面や住宅改良論に代表される建築的側面から語られることが多い。中でも改良住宅普及のために設計競技を通して出品された住宅を実物展示した住宅博覧会は、さながら現在の住宅展示場にも似た、新たな住まい方を提案する新住宅地であった。その住宅博覧会会場を取り込み販売されたこれら郊外住宅地は、住宅のみならず土地の商品化という理由から、計画時に住環境全体を意識して計画されていたと考えられる。したがって、新たな住環境形成のために、計画的な住宅地開発と住宅建築改善の両面をつなぎ、また、そのすき間を埋める役割を担った敷地計画（具体的には敷地選定時の既存環境条件の読み取りや計画時の環境計画的配慮）が存在し、そこには今日でいうランドスケープ・デザイン的な役割が期待されていたと仮定することもできるはずである。本稿では、住宅のみならず、住環境にも目を向けて開発が進んでいたと考えられる明治末期から戦前昭和にかけての、京阪神地区で開催された住宅博覧会を活用し、経営・販売された郊外住宅地の環境計画的側面に着目する。特に各住宅地の開発前の既存環境条件を抽出し、その後の計画内容との関係を検討することによって、敷地計画の存在と、それが果たした役割を確認することが目的である。

研究の方法としては、当時のこれら郊外住宅の経営に関する文献資料さらには、各住宅地の計画平面図、写真、地形図等から環境計画に焦点を絞って分析し考察を進めた。なお、本研究は当時、計画に際し、環境計画以外の諸条件を抱えつつも、環境計画上の立地選定も含め、計画地にどのような環境計画を行ったかを明らかにするものであり、敷地を取り巻く地形やその他環境条件に限って検討考察することは妥当なことと考える。また、研究対象時期としては開発の始まる明治末期から昭和戦前期とし、対象地区を京阪神に限定した。これは郊外住宅地がこの地域に比較的多いこと、計画内容の全貌がある程度読み取れる比較検討に必要な資料が揃っているなどの理由からである。なお、郊外住宅地の住宅、庭園については、既に幾つかの興味ある研究¹⁾が見られるが、それらの多くは、建築、庭園といった個別の要素範囲にとどまり、特に既存環境条件と計画内容との関係についての調査をもとに検

証した具体的な記述はなされていない。

1. 戦前の京阪神地区における郊外住宅地と住宅博覧会の変遷

京阪神地区における住宅地開発は、明治43年の阪神電鉄による西宮の小規模住宅地の開発と、同じく明治43年6月に箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄）によって、「理想的郊外生活地」として売り出された池田室町の住宅経営を嚆矢とする。その後、戦前昭和までに開発された郊外住宅地の数はおよそ80～90カ所に及ぶとみられる。以下では、郊外住宅地の背景にあった計画的な住宅地開発の流れと住宅建築の改良に関連づけつつ、郊外鉄道沿線の住宅地とそこで催された住宅博覧会の変遷の過程をさぐる。

表1には、検討の対象とした期間に行われた主な住宅博覧会と郊外住宅地経営の変遷を、都市計画大阪府地方委員会編『大阪府下に於ける住宅経営地調査』（昭和11年）²⁾をもとにとりまとめている。郊外に延伸する各電鉄会社の開業によって始まった草創期である明治末期から大正初期は計画的な住宅地開発に関連する動向として、明治40年にイギリスの田園都市運動を紹介した『田園都市』³⁾が内務省地方局有志から刊行されることにより、田園都市についての関心が芽生え始めることが上げられる。一方、建築においては、在来住宅批判⁴⁾が欧米での生活経験をもつ建築家を中心に展開され、さらに、都市中間層の台頭により、関心は理想的中流住宅の追及へと移っていく。こうしたなか、田園住宅地の先駆的存在で他をリードした箕面有馬電気軌道により、郊外電車乗客誘致のための大阪府北部における沿線住宅地開発が始まり、その後、徐々に郊外住宅地が事業化されていく。

郊外住宅地が急速にその数を増していく大正中期～大正末期には、計画的な住宅地開発に関連する動きとして、大都市において都市計画を実施する気運が高まる⁵⁾とともに、東京、大阪の郊外で田園都市づくりが本格的に展開されていったことがあげられる。一方、建築では「住宅改良会」⁶⁾が中心となり、住宅改良論議が盛り上がり、大正11年には、東京の上野公園で改良住宅の実物展「文化村」（平和記念東京博覧会）が実施される。この実物展の直後、大阪でも住宅改良の必要性を強く説いていた日本建築協会主催の「住宅改造博覧会」⁷⁾が開かれた。この住宅博覧会は阪急電鉄沿線の郊外住宅地として、既に開発されていた桜井駅に近い桜ヶ丘で行われた。また、実際に展示された出品住宅は設計競技で募集されたもので、当時は住宅改良熱が高まるにつれ、このような設

* (株)大林組設計本部 ** 千葉大学園芸学部緑地・環境学科

計競技も盛んに行われていた。桜ヶ丘で行われた住宅改造博覧会が住環境として整備されつつも、住宅改良の向上を目指した博覧会に重点が置かれたのに比べ、その他の住宅博覧会は住宅販売戦略上の住宅展示的性格が強く、博覧会としての位置づけは弱かった。しかし、いずれも全体の住環境も含めた中で住宅展示を行うことにより、住宅価値を高めている。これら整備されつつあった郊外住宅地の近くに、実物展示による新たな住宅及び住宅地を提示したことにより、都心を離れて周辺郊外住宅地に移り住みつつあった富裕層の指向に合致し、より現実的なものとなる。この頃から大阪市を中心として、放射状に広がるその他の私鉄沿線でも、盛んに住宅経営が行われ、急速に宅地化が進んでいく。住宅博覧会や懸賞設計競技も盛んに行われ、その関心の高さとその急速な開発ぶりが伺えるが、この傾向は戦争と世界的な不況により、その数も徐々に減っていく戦前昭和までつく。こうした動きは、都市中間層の拡大に対する住宅供給問題や都市改造議論といった社会的要請に応えると同時に、先進諸国の事例紹介や研究がすすむにつれ、次第にその目指す理想郷の課題も量から質の問題へと変化していった。

2. 敷地計画の位置づけ

ここでは郊外住宅地形成上その中心的役割を担い、かつ注目を集めた計画的宅地開発と住宅建築改善及び郊外住宅地を含む田園都市に関連した議論から、環境計画の一つである敷地計画の当時の考え方を整理し、敷地計画の理論的位置づけを行う。既に田園都市及び郊外住宅地に関して数多くの実績を持つ欧米諸国の現状を渡欧経験のある当時の指導者が紹介しているが、なかでも興味深いものとして建築家前田松韻の報告がある。これに関しては既に野嶋の研究¹⁾の中で紹介されているが、ここでは前田の報告の中にある敷地計画の項に焦点を絞り、その内容について検討する。前田はその論説『住宅経営について』²⁾のなかで、住宅地の道路線形のあり方は十分な敷地条件の把握を必要とし、そのいかに

によっては風景にも影響を与えると述べ、敷地に関わる計画技術がその後の風景創造に影響することを指摘し、さらに、平地、山の手などの敷地特性に応じた計画のあり方を図版(図-1参照)を用いてかなり具体的に紹介し、海外事例の水準の高さを伝えている。また、その土地の特性に重きを置き、農家のたたずまいを例にあげながら、景観の地域性にまでふ

れている。『建築雑誌』第325号から329号にわたって連続して掲載されたその報告のうち、2つは敷地計画に関連する内容となっており、その重要性を認識していたことが伺われる。用語の解釈などには多少の誤解も見受けられるが、全般的には海外の計画的住宅地のなかに敷地計画の存在をしっかりと見

図-1 大正初期の海外における敷地計画

図-2 海外の敷地計画における断面詳細図

表-1 戦前の京阪神地区における郊外住宅地(住宅博覧会)年表

年日	博覧会名称又は住宅展覧会会場	関西郊外住宅地	年日	博覧会名称又は会場住宅地	関西郊外住宅地
		明治43年 (1909) 6月 池田重町 (阪急) 明治43年 (1909) 西宮 (阪急) 明治44年 (1911) 6月 桜井 (阪急) 明治45年 (1912) 須磨 (阪急) 大正3年 (1914) 4月 豊中 (1期) (阪急) 大正3年以前 (1914) 鶴之荘住宅地 大正3年以前 (1914) 岡町 大正3年以前 (1914) 望ヶ池 (美濃電報懸賞設計案) 大正4年 (1915) 美濃 大正8年 (1919) 北園敷住宅 (阪急) 大正8年 (1919) 12月 美濃 (阪急)	1931年 昭和6年 浜甲子園懸賞住宅展覧会 主催: 大阪毎日新聞社・大林組 場所: 浜甲子園懸賞住宅地 1932年 昭和7年 緑ヶ丘住宅設計図案懸賞募集 主催: 日本建築協会 1932年 昭和7年 8月 大養野田園都市住宅設計図案懸賞募集 主催: 日本建築協会 1932年 昭和7年 8月 大養野田園都市住宅設計図案懸賞募集 主催: 日本建築協会 1932年 昭和7年 8月 東豊中住宅設計図案懸賞募集 主催: 阪神急行電鉄 1932年 昭和7年 10~11月 大養野田園都市住宅博覧会 主催: 日本建築協会 場所: 田園都市住宅地 1932年 昭和7年 10~11月 緑ヶ丘住宅博覧会 場所: 阪急沿線伊丹緑ヶ丘住宅地 1932年 昭和7年 12月 阪和上野芝住宅設計図案懸賞募集 主催: 日本建築協会 1933年 昭和8年 大養野田園都市住宅博覧会 場所: 田園都市住宅地 1933年 昭和8年 大養野田園都市住宅博覧会 場所: 田園都市住宅地 1933年 昭和8年 阪和上野芝住宅博覧会 場所: 田園都市住宅地 1933年 昭和8年 大養野田園都市住宅博覧会 場所: 田園都市住宅地 19		

い出し、敷地計画不在による無秩序な市街地化や景観への影響、さらには将来の都市発展上の衛生、利便性、経済面にとって、直ぐには応用できないと考えながらも必要であると理解し、また、海外事例にあるような計画的住宅地は当時の日本の郊外の現状に適すると考えていた。

一方、計画的宅地開発に関連する側からも同様に、その必要性を説いていたと思われる海外の事例紹介がある。大正 10 年の『建築雑誌』418 号に紹介された内務省都市計画局による「英国住宅助成計画案」⁹⁾と題したその内容は、英国における助成住宅の指針の抄訳であるが、環境計画的側面に関連する土地選定、敷地計画、建築の配置に関して、図版(図-2 参照)を用いてかなり充実した紹介をしている。また、同じく大正 10 年に建築学会で大阪の都市計画部長であり、工学博士の直木倫太郎が『英国住宅政策の経過』¹⁰⁾と題して講演した内容が『建築雑誌』第 419 号に掲載されている。その中で直木は海外の計画的住宅地の特徴をあげ、計画の最初に土地から十分の考慮を凝らし、その地勢に応じて十分に田園都市の精神を汲んだサイト・プランニングが行われ、それが理想的な街を創出する基礎になっていることを指摘し、敷地計画の大切さを語っている。以上から計画的宅地開発及び建築の双方とも、独自の敷地計画に関する考え方や手法を提示するまでには至っていないものの、郊外住宅地計画上の敷地計画の重要性を大正前期からは十分に認識していたと判断される。このような状況にあった数々の郊外住宅地計画のなかに、その環境計画的側面を敷地計画の段階において見出し得ると考えられる。そこで、以下ではいくつかの郊外住宅地の環境計画的特質を具体的に探ってみることにしたい。

3. 郊外住宅地にみられる環境計画の特質

ここでは、個別の郊外住宅地において、具体的にどのような環境計画的配慮が試みられたかを当時の地形図(開発前後)と住宅地計画平面図を主な手がかりに検討してみたい。なお、検討対象とする住宅地は 12 箇所とした。これは、検討に必要な地形図(開発前後)及びその全貌がある程度判読可能な住宅地計画平面図の 3 点が揃っていることを基準に、収集した住宅地事例の中から選定したためである。ただし、東豊中住宅については計画範囲が山林の広範囲に及んでいるためか、計画平面図は入手できなかった

ものの、地形図(開発前後)からその状況が判読可能であるため、検討事例に含めることとした。また、あわせて各住宅地に関する一般的な文献資料を参考にしつつ、そこに見え隠れする環境計画の特質を探りたい。各住宅地計画から読みとられた環境計画的配慮とその特徴を住宅地経営開始年次順に表-2 にまとめた。この表-2 をもとに各住宅地環境計画の特徴を述べ、環境計画的配慮から視た類型化を試みることにする。なお、配慮の顕著なものを●とし、配慮の少ないものを○とした。また、配慮のないものは―印とする。

環境計画的配慮から視た類型化

まず表-2 の環境計画的配慮項目はその性格から次のように分けられる。一つは良好な環境条件を備えた敷地の選定と衛生設備や街路等の基盤整備的な性格を有する配慮。2 つ目は地形条件や周辺の集落、並木や池、沼など既存環境ストックとの関係への配慮。3 つ目は街路や広場、公園などの計画的配置や修景を通じて、積極的かつ能動的に土地に働きかけることで新しい景観創出を目的とする配慮の 3 つに分類(縦線の点線で囲われた 3 つの分類)される。またこれら 3 つはその配慮性格からみて、立地基盤整備型、既存環境資源依存型、環境創造型を示した分類と言える。以下ではこの 3 つの視点から各住宅地計画を考察する。環境計画的配慮項目の分布から各住宅地は桜ヶ丘住宅地より前のものと桜ヶ丘住宅地計画以降のものに大きく 2 分されることが明らかに読みとれる。前者が敷地選定や基盤整備にとどまっているのに対し、後者は敷地選定や基盤整備の他に既存緑地環境ストックの活用や街路景観の整備さらに広場や緑地環境を創出し、積極的に今日のランドスケープ・デザイン手法に通じる操作を配慮したものが見受けられる。このことはこの時期に関連する学会などでも、敷地計画にも触れた海外事例が報告されはじめる時期にあたること。また、住宅改良を目的に実物展示を施した『住宅改造博覧会』が行われ、単に住宅のみならず一つの住環境として整備された桜ヶ丘住宅地が現れる。これらが当時及びその後の郊外住宅地の環境計画に何らかの影響を与えていたとしても不思議はなく、このような違いをもたらしたと考えられる。ここで、前者にあたる池田室町、桜井、豊中のうち代表的な豊中住宅地を取りあげ、その特徴を検証してみることにする。豊中住宅地(大正 3 年)

表-2 各住宅地における環境計画的配慮

環境計画的配慮	住宅地名称	池田室町 明治43年	桜井 明治44年	豊中 大正3年	桜ヶ丘 大正10年	浜甲子園 昭和3年	阪和上野芝 昭和5年頃	大美野 昭和6年	緑ヶ丘 昭和7年	東豊中 昭和8年	瑞光 昭和8年	初芝 昭和9年	青葉丘 昭和13年
住宅地に適した敷地選定		●	●	●	●	●	●	●	●	●	—	○	—
住宅地からの眺望		●	●	●	●	●	●	●	●	●	—	—	—
施設等による付加価値化		●	—	●	●	●	●	●	●	—	—	●	—
インフラ整備		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
既存緑地環境 ストックの活用		—	—	—	●	●	●	●	●	●	—	○	—
微地形の活用		—	—	—	●	—	●	●	●	●	—	○	—
周辺敷地との連携		—	—	—	○	○	●	●	●	●	—	●	—
街路景観の整備		—	—	—	○	○	●	●	●	●	—	●	○
歩車分離		—	—	—	—	●	●	●	—	—	—	●	●
緑地環境の創出		—	—	—	—	●	●	●	●	—	●	●	—
辻・広場・公園の設置		—	—	—	—	○	●	●	●	—	●	●	—
住宅周辺の修景		—	—	—	●	—	●	●	—	●	—	—	—
備考				イメージ創出のための豊中 グランド	住宅博覧会の開催と庭園敷地形に即した敷地計画曲線利用の街路計画	緑地帯の整備小公園の設置街路側による景観整備 11) 既存松並木の取り込み	親水公園の位置づけの公園シークエンスを持った街路敷地形に呼応した敷地計画	クルドサック状の敷地計画辻や広場と街路による有機的な連携した敷地計画住宅 12)	既存池沼の大規模活用住宅地全体の庭園化	桜並木のある街路景観の整備 13)	小公園を取り囲む住宅配置と広場のネットワーク的位置づけ小公園の設置	ヒエラルキーを持った街路と広場のネットワーク計画隣接住宅との有機的連携づくり

図-3 豊中住宅地計画図（大正3年頃）

図-4 桜ヶ丘住宅地計画図（大正11年）

計画図（昭和5年頃）

開発前（明治17年）

計画図（昭和7年頃）

開発前（大正12年）

計画図（昭和9年頃）

計画図（昭和7年頃）

開発前の地形図から、いずれも住宅地の大半が、開発前乾田であった地域に含まれることから、高燥な環境を確保するために敷地の環境特質を十分に認識して土地選定を行ったと考えられる。さらに、計画平面図（図－3 参照）から健康や文化といったイメージ形成のための運動施設（豊中グラウンド）を設ける¹⁵⁾ものの、敷地選定や既存環境とは無関係な施設などによる付加価値化や基盤整備にとどまり、既存緑地環境ストックへの配慮や新しい景観の創出を目的とする積極的な土地への働きかけは見あたらない。次に桜ヶ丘以降の住宅地計画について、考察すると、次のようにまとめられる。

1. 桜ヶ丘・浜甲子園などの今日のランドスケープ・デザイン手法にも通じる操作による新しい景観の創出を目的とする配慮の位置付けが弱い大正中期から昭和初期にかけての住宅地計画。
2. 3点とも充実した配慮が行われた阪和上野芝・大美野田園都市などの昭和初期の住宅地計画。
3. 既存緑地環境ストックとの関係への配慮に重点を置いた積極的かつ能動的な土地への働きかけにより、新しい景観の創出を目的とした緑ヶ丘・東豊中などの戦前昭和中期の住宅地計画。
4. 瑞光・初芝・青葉丘等の敷地選定、眺望、既存緑地環境ストックの活用などの配慮がみられず、逆に草創期にみられなかった今日のランドスケープ・デザイン手法にも通じる操作の積極的な展開により、新しい景観の創出を目的とする配慮を施した戦前昭和後期の住宅地計画。

このように桜ヶ丘以降のなかでも4つの性格に分類されると考える。以下にこの4タイプの代表例を挙げその特徴を考察する。桜ヶ丘（大正11年）

計画平面図（図－4 参照）から高燥な環境条件を満たすよう土地選定を行った上で敷地に隣接する竹林、針葉樹林、池、また微妙な地形変化に呼応するような街区設定を行いつつ、緩やかな曲線街路を取り入れて街路景観を整備している。また、各住宅はその曲線街路に直交するように玄関アプローチを設けており、おそらく従来の家重視の住宅とは異なった住宅建築の配置を行ったものと考えられる。また、住宅博覧会用に公園の設置を行っているが、当初、桜ヶ丘は住宅博覧会に力点が置かれており、公園等は住宅博覧会用という性格が強く、住宅地の中での位置づけが弱いことから、今日のランドスケープ・デザイン手法に通じる操作により、新たな環境を創造しようという配慮はやや乏しいと判断される。

阪和上野芝（昭和5年頃）

計画平面図、開発前の地形図（図－5 参照）からは、敷地内に既存環境緑地と中央分離帯をしつらえた基幹道路などにより、既存池に面する親水空間に位置づけたと思われる公園や微妙な地形変化に適合させた各辻とを結んだ様子を読み取れ、さらに単なるインフラ整備としてではなく、各施設に性格付けをし、一つのシーケンスをもった景観づくりを街全体にイメージしたものとなっている。このように環境計画的配慮の3点とも充実した計画となっており、開発後の地形図に、その後同じ上野芝で開発された上野芝向ヶ丘に同様の敷地割をみることができることから、この阪和上野芝住宅地が良好な住環境を創出していたと推察される。

緑ヶ丘（昭和7年）

計画平面図・開発前の地形図（図－6 参照）から住宅地内に2つの既存池を活用した遊園地が設けられ、全体としては池を中心に住宅が取り囲むようにして配置されていることが読み取れる。2つの池の名称を伊丹上池、下池と名付け、さらにその堤状の景観を一層強化していると推察されるなど、その景観づくりの発想に住環境全体を庭園のように構成するという意図が読み取れる。少し利便性の点で劣るこの地をあえて選んだ理由の一つには、明らかにこの池沼を新たな住環境を創り出す際の仕掛けの一つに取り

入れようとしたことが考えられる。

初芝住宅地（昭和9年）

計画平面図、開発前の地形図（図－7 参照）からは魅力的な環境ストックは見当たらず、既存緑地環境ストックの活用等の環境配慮は読みとれない。しかし、そんな条件の下、住宅地全体の環境を魅力的にするために、駅から住宅地までの間に、植栽帯のある駅前広場、7間道路（基幹道路）、住宅地内の基幹道路（5間道路）、中央広場、住宅地に向かう放射状の街路等、ヒエラルキーを持たせるなど、住宅地内に有機的な連携をつくり出し、住宅地としてはポテンシャルの低い地に魅力的な住環境を創出している。これは敷地条件の厳しさやその他の社会条件により、住環境に適さない不利な条件でも、今日のランドスケープ・デザイン手法に通じる操作により新しい景観の創出を目的とする環境計画的配慮を住宅経営に反映しようとしたことが伺える。

以上12カ所の郊外住宅地を事例として、その環境計画の特質を探ったが、それらは以上のように5つに分類された。このように大正中期以降に形成された郊外住宅地には、環境計画的な性格を帯びた敷地計画の存在が確かに読み取れる。また、その際今日のランドスケープ・デザイン手法にも通じる操作による配慮の位置付けが年次を追うごとに大きくなっていったと判断される。

4. 住宅地の不動産経営戦略

ここでは当時の郊外住宅地を経営する事業者が環境に対してどのような考えを持ち、敷地計画の理論を実際の不動産経営戦略にどのように反映したかを、3つの郊外住宅地に関する記述を手がかりとして探してみたい。

（1）池田室町ほか

当時の箕面有馬電気軌道が発行した小冊子に池田室町（池田新市街）の記述がある。『理想的田園都市・池田新市街』¹⁶⁾と題した内容を以下に引用してみよう。「理想的田園都市池田新市街！池田町に接続し、梅田より電車僅に三十分、五月山の翠微を北に負ひ、猪名川の清瀬を西に聞き、夏は涼風青簾に入り、冬は南窓火桶を忘る。眞の樂土に建設せられた、ここ室町の新市街に就ては、…中略…、田園を樂み野菜培養、養鶏に便する爲め庭園及後圃を廣くするなど當初の目的に反せざる様努力した結果は、非常なる稱賛を蒙り、…」とあるように、環境条件の良好なることを詠い文句にした経営戦略が見え隠れる。

また、箕面電鉄沿線について同じ資料には「冬は暖く、夏は涼しく、桜井住宅地新築落成」とのタイトルを冠した桜井の分譲広告には「お座敷の前面には丘陵畫の如く連れり」との記述もあり、その眺望の良い環境を最初の方に載せている。阪急電鉄の社史¹⁷⁾によると小林一三が創立当初から沿線各地に住宅地に適した土地が存在することを知り、住宅地開発を構想し、開業時には既に沿線予定地を買収していたとある。また、開業に先立ち、発行したパンフレット『如何なる土地を選ぶべきか 如何なる家屋に住むべきか』¹⁸⁾との表題からも、容易に環境を意識していたことが読み取れる。同時に、創業者の先見の明と土地選定の手腕を改めて伺知ると同時に、敷地条件の読み取りの重要性を十分に認識していたことが推測される。

（2）浜甲子園

次に浜甲子園の『理想的健康住宅地』¹⁹⁾と題した大林組作成のパンフレットにも当時の住環境に対する意識の表われを読み取ることができる。その中から、環境に関する部分を抜粋すると、「健康と住宅と住宅地と…。この三つが相互に大きな関係を持っている事は皆様既によく御存知です。光遍き太陽、清澄な空気、清らかな水、美しくも亦静穏な環境、之等こそ、健康をはぐくむ力強い乳母であり、之等の裡に強い肉體の誕生があるのです。浜甲子園！そこでは朗な太陽の下に、木も土も波も、総てが満ち溢れる

健康感に躍動して居ります。・・中略・・海波静かに陽光麗かな浜甲子園こそは、脈々たる生命感に包まれた家と土地との素晴らしい融合地であります。」とあり、健康と住環境を関係づけて浜甲子園健康住宅地としてのイメージを紹介している。特に文中にある家と土地との融合地という表現は敷地と施設との関係に対する意識の現われであり、環境に対する関心の程が伺われる。

(3) 初芝

昭和11年刊行の『南海鉄道開通五十年』²⁰⁾のなかで、昭和9年の初芝での理想的田園住宅地の経営についての記述がある。そのなかでこの住宅地が趣味的田園生活の条件を具備しているとし、その理由の第一は空気の新しさ、第二に眺望の良さ、第三に池沼による水景の良さ、第四に果樹などの栽培に適す地であることを上げている。計画内容に関しては、まず住宅地全体を「スッキリとした近代的明朗気分を引き立てている」ものとして、駅から住宅地までを結ぶ舗装道路と歩車を分離したことをあげている。また、中央広場から放射状にのびる道路と、それらに沿って植栽される街路樹や緑樹帯の存在を環境形成の主たる要素として評価している。

以上から当時の住宅経営の先駆的かつ指導的存在であった阪急電鉄の小林一三や大きな影響力を持った事業者等の敷地選定に対する姿勢には、様々な制約が予想される条件下にあっても、これら住宅地計画にとって敷地選定などの環境計画が重要視されていたことは明らかなことと判断される。鉄道経営上安定した旅客収入増大のため、その沿線に計画地を求めたことは事実だが、前出の第2章でも取り上げたような、前田や直木などの識者らによって紹介された海外事例を豊富に含む住宅地計画にとって必要であると説かれた敷地計画に関する理論(敷地特性に応じた計画、十分な敷地条件の把握、計画初期のサイトプランニングの重要性など)を、自らの住宅地経営事業のよりよい住環境イメージの形成のために、反映させようとしたことは容易に判断される。

おわりに - 戦前の郊外住宅地におけるランドスケープの様相

これまで検討してきた郊外住宅地の環境条件や計画平面図の読みとりをへて、都市インフラとしての計画的宅地開発事業や住宅建築改善との関連において、また、民間電鉄会社による不動産経営の商品として、郊外住宅地開発のなかに組み込まれていた環境計画的側面が抽出されたと考える。そこではあきらかに既存の環境条件を踏まえた計画手法の取捨選択が行われ、しかも環境に対する意識を持ち、計画を行ってきたといえるであろう。特に桜ヶ丘に始まる大正後期から戦前昭和中期の住宅地計画の多くは、計画に際し、様々な制約が予想される条件下にあっても、住宅地として相応しい敷地選定を行った上で、環境計画を行ったといえるであろう。そこではランドスケープデザインという名の職能の存在は認識されていなかったかも知れない。しかし、ランドスケープ的感性や意識を持ち、その役割を敷地計画が果たしていたと推測することは十分に可能である。

これに関連する興味深い事項として『建築と社会』第9巻2号(昭和2年)に掲載された大屋霊城による『二つの花苑都市建設に就いて』²¹⁾と題した論説にふれておこう。内容は阪急電鉄と大鉄電車(現在の近鉄)の両社からの二つの異なった花苑都市の相談に応じたことを述べている。前者の相談はその記述内容から浜甲子園一帯の話と推測される。大屋は大学で造園学を学び、当時は大阪府都市計画地方委員会技師であった。大正10年に1年間、都市計画と公園緑地の海外視察調査に行き、E. ハワードにも直接会って学んだ経験を持つ。²²⁾その大屋に電鉄会社等の事業者が相談に行っているのである。このことは当時、事業者が計画にあたって、環境計画に関する指導を大屋のようなランドスケープ・アーキテクトから受けていたことを示し、同時に、現在のランドスケープ・デザインに通ずる大きな役割を果たした敷地計画の存在があったと考えられる。

補注・文献

1) 西村公宏(1994):大正後期から昭和初期にかけての住宅競技設計における実用庭園について:造園雑誌 52(5), 19-24. 野嶋政和(1994):明治末期から大正初期にかけての郊外住宅地の構想:造園雑誌 57(5), 49-54	8) 前田松韻(1915):住宅経営について:建築雑誌 325号~329号 6-9. 326号 46-55. 327号, 18-26. 328号, 10-18. 329号, 10-14.	図案集・東豊中住宅設計図案, 50-71
2) 日本建築協会(1988):住宅近代化への歩みと日本建築協会: 86-89	9) 内務省都市計画課(1919):英国住宅助成計画案:建築雑誌 418号, 409-441	15) 豊中市史編纂委員会(1963):豊中市史本編3巻: 226-228
3) 内務省地方局有志(1980):田園都市と日本人:講談社	10) 直木倫太郎(1915):英国住宅政策の経過:建築雑誌 419号, 471-487	16) 吉岡重三郎(1914):山容水態・臨時号:箕面有馬電気軌道株式会社, 16
4) 内田青蔵(1992):日本の近代住宅:鹿島出版会, 56	11) 阪神電気鉄道株式会社(1985):阪神電気鉄道八十年史: 209-212	17) 阪急電鉄株式会社(1982):阪急電車75年のあゆみ: 10
5) 越沢明(1991):東京の都市計画:岩波書店, 13	12) 大美野田園都市住宅博覧会出品住宅(1932):建築と社会 15(10), 26-31	18) 前掲 16), 11-12
6) 前掲 4) 72-86	13) 鹿島友治(1980):ふるさとの思い出写真集・明治大正昭和・豊中:国書刊行会, 66	19) 株式会社大林組(1928):理想的健康住宅地:頁なし.
7) 前掲 2) 73	14) 日本建築協会(出版年不詳):続住宅	20) 南海鉄道株式会社(1936):南海鉄道開通五十年: 48
		21) 大屋霊城(1927):二つの花苑都市建設に就いて:建築と社会9(2), 23-30
		22) 清水正之(1997):大屋霊城・初代の緑の都市計画家:ランドスケープ研究 60(3), 203-206

Summary: Suburban housing development in Japan before World War II, those in Keihanshin Area in particular, has been investigated in terms of environmental planning and site design. Based upon the recognition of importance on environmental aspects by some leading architects and planners, some housing developments along the railways which had been extended into suburban area enhanced the environmental features of the region and the site. Detailed examination of the site plans prepared for housing exhibitions of 12 development areas revealed that layout plan of most development projects took advantages of the factors to be attributed in natural features of the region and the site. Also, those features of the environment were promoted for sales of several development areas as well.